

大阪城築城が育んだ食文化

大阪市西区の新町南公園を通るたびに気になる石碑があった。そこには「ここに砂場ありき」と大きく刻み込まれている。植え込みの中にひっそりとたたずみ、まったく目立たない約1.5坪の石碑。今まで、子供たちの公園の遊び場の「砂場」のことだと思っていたが、それも何だかおかしい。近づいてみると、驚くような史実が書かれていた。

(上岡由美)

「そば店」発祥の地は…

● 「ここ」に砂場ありき

「天正十一年（一五八三）九月、豊大徳秀吉公大阪築城を開始、浪速の町に数多、歴大を極めし養生寮、揚設けらる。略）人夫、工費無保、昔日夜露集す。人集まる所食を要す」（石碑の裏面に「ここ」に記され、側面には種類業関係をもつ大阪のそば店生四〇〇年を祝う金が昭和60（1985）年に建立したことが書かれていた。それが手がかりを求めて最終於に訪れたのは大阪府豊島区東生利生衛生同業組合大阪市西区、平田敏雄事務理事（77）のこの地は、砂や砂利など大阪城の築城資材が置かれた場所だったので、通称「砂場」と呼ばれていたんですと説明してくれた。大阪城築城といえは、東京五輪や大阪万博にも匹敵するほどの大事業。全国から土木工事関係者集まり、必然的に隣の種類の店が開設したという、それがそば店だった。そのことを記した文献もある。嘉永2（1804）年に発行された「三千年先正正正」(1805)年の翌年、そばを扱う店が創業したと記されている。

「ここ」に砂場ありき」の石碑の裏面に「ここに記され、側面には種類業関係をもつ大阪のそば店生四〇〇年を祝う金が昭和60（1985）年に建立したことが書かれていた。それが手がかりを求めて最終於に訪れたのは大阪府豊島区東生利生衛生同業組合大阪市西区、平田敏雄事務理事（77）のこの地は、砂や砂利など大阪城の築城資材が置かれた場所だったので、通称「砂場」と呼ばれていたんですと説明してくれた。大阪城築城といえは、東京五輪や大阪万博にも匹敵するほどの大事業。全国から土木工事関係者集まり、必然的に隣の種類の店が開設したという、それがそば店だった。そのことを記した文献もある。嘉永2（1804）年に発行された「三千年先正正正」(1805)年の翌年、そばを扱う店が創業したと記されている。

● そばの起源は

では、そもそも日本でそばは広く食べられるようになったのはいつごろか。鎌倉時代、神僧が中国から蕎麦豆を持ち帰ったからといわれている。当時は田子炊の「そばまきや」が「そば」として食された。

今のように細く切った麺状の「そば切り」が登場するのは戦国時代。信州曾根にある定勝寺の天正2（1574）年の記録に「蕎麦切」に「そば切りを振る舞った」と記述があり、寺院や茶席で食われていたんだ。発祥の地として「信州」と「甲州説がある。一方、関西のそばは、兵庫豊島岡市の「出で」は、江戸時代中期の享永（1706）年に「福屋」田澤から信州岡田石澤に開きえとな



「ここに砂場ありき」と刻まれた石碑の説明をする平田敏雄さん 一 大阪市西区

● 大阪商人の心意気

大正14（1925）年に大阪・ミナミでそば店として創業し、現在、うなぎすきで知られる美女仰（大阪市中区）相談の産摩知一さん（89）。「蕎麦の世界一」などの著書もある産摩さんが、こんなエピソードを教えてくれた。

ある店が「ここ」流行ったため、近所のライバルのそば店が繁栄に迫り込まれた。それを聞いて産摩店主が「私かあなたは同業、いわば兄弟みたいなもの。産摩業はひとこと、一夜の時にやる定年制め、お客さまを待たす」の電話に答え、お返しに店先へ。

産摩さんは「自分の店利益だけを追求するのは、同業者とみんな来ようという、本業の大阪商人の気性を表している、面白い」と語った。

● ついでに押され消えた

浪速の物ともはや打撃された「そば」は現在、大阪府内に押し込まれた。その影響に明治に入ると大阪の麵業市場はほとんど「うどん」一色になり、看板は「うどん」でさえはびこるようになった。

「砂場」の東京への進出について明確な記録は残っていないが、「虎ノ門砂場」の5代目、16歳店が加盟する「砂場会」会長業の稲垣隆一さん（76）は「江戸に『ごみやや』のゆかりの者が移り、随分早くに店を開いたと聞いています。今も大阪から出た店だ」ということを忘れないように、れんに「大阪」の文字を入れていきます」と語った。

土方で生まれ、江戸に定着してたそばは、平田事務理事は「砂場」という屋号を持つ店も「ごみやや」にはあらず、大阪、日本最古のそば店があった。たが、人でもよくくの人を知っていたら、この類の大阪の文化復権を願っている。



摂津名所図会の中にある「砂場いづみや」の調理場と客席（大阪市立中央図書館所蔵）

